

歴史家・工藤光一を道しるべとして

大川 正彦

工藤光一先生が昨年1月10日に亡くなられてから、早くも一年の月日が経過した。

訃報に接した海外研究所所員のうち、深い親交のあった先輩、友人、同僚にあたる方々から、本誌前号に追悼文を寄せていただいた。

また、立石博高先生、岩崎稔先生、篠原琢先生、そして国際基督教大学の高澤紀恵先生が呼びかけの中心となられるかたちで、6月21日に、「工藤光一さんを偲ぶ研究集会」が催され、お三方の研究報告が行なわれた。小田中直樹「政治」の「文化」から「政治的なるもの」の「文化変容」へ—工藤光一のフランス史研究に寄せて」。林田伸一「近世史研究者から見た工藤光一の歴史学」。谷川稔「工藤さんのお仕事をふりかえる」。—この時と場所は、三人の論者それぞれの立場から深められてゆく、工藤光一の人と仕事の読みを通して、あらためて工藤先生が残された事の重みを、偲ぶ会参加者ひとりびとりが噛みしめる大切な時間となった。

会への出席者お一人おひとりに対して、絵里夫人から配布された、「工藤 光一 56年の歩み」という冊子が手元にある。いまあらためて頁を繰ってみると、ここには、一個の作品ともいふべきこの冊子に込められたご家族の思いとともに、工藤先生のお人柄と「静かな賢人」ぶりが眼前に立ちあがってくる。

冊子とともに手元にあるのは、もう一冊。『近代フランス農村世界の政治文化—噂・蜂起・祝祭』（岩波書店、2015年11月19日刊）。高澤・林田両氏による「あとがき」によれば、エピローグだけが書かれずに残されていたものが一書となったのだという。

それぞれの生活のなかで、政治とは？ 文化とは？と自問しながら、あるいは日々の生活のなかでのさまざまな問いと押し問答をし何とかやりくりしてゆきながら、ふとしたときに、自らの足場を確かめるために、足元を踏み固め直すためにこそ、歴史家・工藤光一が遺したこの作品は群読されてよい、と、わたしは思う。群読とは、ひとび

とが、群れ集い、あるテキストのなかで自らが選んだ一節を声に出して読み、その声たちが響き合うその場を味わい、そしてまたそれぞれの生活場へと還ってゆき、群れ集い読んだ経験をそこで踏みしめる、束の間の生の実験をいう。わたしたちひとりびとりが、それぞれの道を歩み進めてゆくさいに、一書は、きっと、ひとりびとりにとっての道しるべになってくれるにちがいない。そして、工藤先生のもとで学ばれた方々が作成された、以下に掲載する業績に記されている数々の作品群に出会い、あるいは出会い直すことをつうじて、わたくしもまた、歴史家・工藤光一を道しるべとして、今日一日の歩みをつづけたい。

なお、今春3月刊行の『ふらんばー』（東京外国語大学フランス語研究室論集 FLAMBEAU）41号で、工藤光一教授追悼号の特集が組まれているので、あわせてお読みいただきたい。

(OKAWA MASAHIKO・東京外国語大学)